撮影／豊田直巳

商店街入口に立つ看板「原子力明るい未来のエネルギー」。その前で、防護服を着て抗議する夫婦＝2015年12月、双葉町。原発推進を掲げる町の象徴だったが、未来を奪った原子力エネルギーの皮肉な現実と、原発の安全神話の結果は、あまりの無惨さを思わせる。

A2パネル.indd 1 2022/02/24 11:32:59

撮影／豊田直巳

帰還困難区域内にある避難者の自宅。原発事故が起きるまで、９人の大家族が暮らしていた。原発事故から10年経っても、線量計は東京の30倍以上の放射線量を示した＝ 2021年４月、浪江町津島地区。

A3パネル.indd 2 2022/02/24 11:33:00

撮影／豊田直巳

防護服でお墓参りをする元住民の姿＝ 2021年８月、浪江町津島地区。
2023年には特定復興再生拠点区域として避難指示が解除される。周囲は放射能汚染が酷い帰還困難区域のままだが、家や国道周辺を除染しただけで、『帰れ』と言われることになる。

A2パネル.indd 3 2022/02/24 11:33:02

撮影／豊田直巳

時が止まったままの保育園。園内に残された通園バッグ＝ 2021年10月、双葉町。
お別れ会とお誕生会を一緒に開いていたが、そのまま10年の月日が経った。バッグは持ち出すことができない「特定廃棄物」扱い。昨年末、この保育園は取り壊された。

A2パネル.indd 4 2022/02/24 11:33:04

撮影／工藤史雄

富岡町の回転寿し店は、震災当日のまま。レーンにはお皿が乗ったまま、テーブルには湯飲みや小皿がひっくり返ったまま、9年間時が止まっていたが、2020年夏ついに解体された。

A2パネル.indd 5 2022/02/24 11:33:05

撮影／工藤史雄

富岡町の中学校の体育館。3月11日は卒業式の日だった。その片付けが終わらないうちに巨大地震が起き、近隣住民の避難所となる。事態はその後原子力緊急事態に。次の日の朝にはバスが迎えに来て、全町避難。以来ここは時間が止まったままだ。あの日は寒い日だったので、ストーブを持って来たり、具合の悪い人がいたのか、保健室のベッドを持ち込んだりしている。ステージには電気ポット、奥には缶詰や乾パンの缶もそのまま残っている。ここも2020年夏に解体された。

A2パネル.indd 6 2022/02/24 11:33:05

撮影／工藤史雄

双葉町では「東日本大震災・原子力災害伝承館」の敷地部分だけは避難指示が解除されたが、それ以外は帰還困難区域のままとなっている。画面奥が国道6号線や双葉駅のある街の中心部で、表側から入るとわからないが、海側から入ってくると周囲には津波で流されたがれきがそのまま残されていた。この日は菅首相も伝承館を訪れていたが、首相の乗ったバスからは見えない位置にある。「福島のいま」を端的に表す一枚。2020年9月26日撮影

A2パネル.indd 7 2022/02/24 11:33:06

撮影／工藤史雄

同じく駅に向かう道路だけ解除になった富岡町夜ノ森。バリケードの隙間から空間線量計を差し込んでみると0.3μSv/h。自分のいる道路上では0.1μSv/h以下なので、明らかに違うことが分かる。除染の基準は0.23μSv/h。

A2パネル.indd 8 2022/02/24 11:33:07